

---

# 桜恋—サクコイ—

yoshina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜恋―サクコイ―

### 【Nコード】

N8475D

### 【作者名】

yoshina

### 【あらすじ】

前作「プリン記念日」「花の下の君」の加筆修正版を加えた、平和ほのぼの短編集。春っぱい話でまとめてみました。

## 1、スクランブル幸福論

服部平次は困っていた。

もうすぐホワイトデー。バレンタインのお返しをしなくてはいけない日である。

勿論彼は色んな人から色んなものを貰っている。

警察関係の人間の場合は、母の静華が代わりに百貨店でお菓子を買ってきてくれるから、そこに關して悩む必要は無い。

そんな母に対しても、毎年花を父親と連名で贈っているので問題無し。

そして残ったのが、幼馴染の遠山和葉である。

「菓子だけ渡すつちゅーのも、なんかケチくさい気がするしなあ…」

…」

夕食後、自分の部屋で椅子に座りながら唸る。

かれこれ一時間くらいキャスター付きの椅子をくるくる回して、彼は彼女へのお返しに悩んでいた。

毎年こんな風に悩んでいるわけではない。

前年までは、彼女からチョコを貰って、自分も三月十四日にクッキーをお返しにあげている。

それがなぜ、今年はここまで困ることになったのか。

原因はたった一つ。

目の前の机に置かれた真新しい手帳だ。

バレンタインデーの日、和葉はチョコと一緒にこの青い手帳も平次にあげたのである。

「平次、昨日事件の概要を手帳に書いてる時最後のページやったやろ？ だから、これもあげる」

彼女はそう言って平次に渡した。

その時は彼も「へえ、お前にしては気が利くやんか」と、からかい半分にお礼を言うだけだったのだが。

ホワイトデーが近づいてきて、いつものように百貨店でお返しの菓子を選ばうとした時に、はたと気付いたのだ。

彼女はチョコに加え手帳をくれたのに、自分は菓子だけでいいのだろうか、と。

第三者から見れば、かなり細かくてどうでもいい悩みである。だが、彼にしてみればものすごく難解なことだった。

去年より高めの菓子を選んだらいいのだろうか。

いや、手帳というモノを貰ったのだから、こちらもモノで返したほうがいいのかもしれない。

だったら、彼女が今貰って嬉しいものは何なのか。無難にシャーペンとか？ ノートとか？

いやいや、そういった必需品に関して彼女が不足しているはずはないし、十分あるものを貰ってもありがたみが薄い。

そうなれば、女子ならいくらあっても困らないアクセサリーではどうだろうか。

いやいやいや、いつも「そんなチャラチャラつけてても、つける本人がぶっさいくやつたら意味無いで」と揶揄する自分があげては、矛盾が生じる。

彼女に仕返しで突っ込まれるのがオチだ。どうする、どうなるホワイトデー。

このように脳内で、堂々巡りの状況が暫く続いていた。

これだけ付き合いが長いのに、彼女の欲しい物が全くわからないのが、我ながら心外だった。

彼女の自分に対する気遣いほど、自分が彼女に気を遣ってなかった証拠だ。

穴が空くほど目の前の手帳を見つめて、平次はため息をつく。

「あー、何でこんなことに俺が悩まなあかねん。全部和葉のせいやで、くっそー」

頭をがしがしとかく息子の姿を、気配を消した静華が、ドアの間からこっそりのぞいて微笑んでいた。

「おはよー、平次」

「……おう」

翌朝、寝屋川駅でいつものように和葉と合流した平次は、若干げつそりとした感じで頷いた。

結局、昨日の夜は寢床についてからもずっとお返しを考えていたせいだ。

「何か元氣無さそうやなあ。ちゃんと寝たんか？」

「うつさい、お前には関係無い」

「何その言い方。……あ、そうや！　じゃあこれあげる」

彼女がかばんから取り出したのは、眠氣覚ましのガム。  
平次は思わず受け取りそうになるが、はっとして手を引っ込めた。

「や、やっぱあかん！」

「え？」

「あかん、もう俺に何も渡すな和葉」

必死に首を横に振って彼は、真顔で静かに言う。  
これ以上何かをもらっては、もっとお返しに迷ってしまいそうな気がする。

彼の直感がそう告げる。

しかし、そんな葛藤は彼だけの問題であって、彼女にはあずかり知らぬことだ。

「何やあんだ、あたしのせつかくの厚意を無駄にする気？」

「やから、そこまでしてもらわんでもええっちゅうねーん!!」

ずいとガムを差し出す和葉に、平次は後ずさりしながら悲痛な声を出す。

あまりにも余裕が無さ過ぎて、詰め寄る彼女の顔がどこか楽しそうなのには気付けない。

（昨日メールでおばちゃんから教えてもらってたけど、まさかここまですんで悩んでくれてるなんてなあ）

和葉は笑みがこぼれそうになるのを、必死で押しとどめる。  
静華から昨夜送られてきたメールには、「バレンタインのお返しで平次が相当悩んでいる」と書かれてあった。

そんなつもりで手帳を渡したわけでは当然無い。

しかし、実際にこうやって自分からの贈り物に戸惑う彼を見ると、嬉しくならないわけが無かった。

悩むことを放棄して、その辺のモノでお返しを済ませる気が、彼には無いとわかるからだ。

その気持ちだけで、彼女にとっては十分すぎるお返しだった。  
しかし、

「ガムがあかんのやつたら、缶コーヒーでも買ってあげよかー？」

「いや、結構です結構です！！」

慌てふためく彼がどこか愛おしく感じて、差し出したガムを仕舞えない。

（いつも振り回されてるし、たまにはええよね）

愛情のささやかな裏返しは、電車が来るまで続いたらしい。

## 1、スクランブル幸福論（後書き）

B G M：花は桜、君は美し（b yいきものがかり）

新作↓プリン記念日↓新作↓花の下の君↓新作  
という順番で投下する予定です。

## 2、プリンプリン記念日

十年ぶりに、熱を出した。

しかも季節はずれのインフルエンザである。

三日前、三十九度という高熱でぶっ倒れた後、平次は自室のベッドの上で、大人しく寝ていた。

最近の多忙が祟ったのだ。

三学期に入った頃から事件が増え、剣道の大会が近いおかげで部活も忙しくなり、ついでにそのせいで成績が下がることは自分のプライドが許さないのも、いつもどおりに勉強もして。

特に、事件よりも案外剣道のほうが大変だった。

学校単位の団体で出場する大会が春休みにあるので、総大将且つ副部長の平次は、大会メンバーの選出に悩んでいた。

もちろん部長と相談はしていたが、腕を見る目は明らかに平次のほうが上で。

二人の間には暗黙の了解みたいな感じで、平次にメンバー選出決定権があった。

（ほんまやったら、一年の相沢を入れたいところやけど、二年の加藤のほうが努力はしてるしなあ……。でもほんのちよつとの差で実力は相沢のほうが上なんやな。加藤がもうちょい腕上げてくれたら選ぶのも簡単やけど）

側に置いてた部員一覧の用紙を手にとって眺める。

そこまで重要な大会ではないため、完全実力主義で選ぶのもどうかと彼は思っていた。

他にも、最近稽古に熱中しすぎて悪い方向に競争意識が高まりつ

つある、一年部員達のことをどう修復させようかなど悩ましいところはある。

(……あかん。こんなことを考えてたらまた熱が上がってしまうわ)

インフルエンザにプラスして知恵熱まで出てしまったのは、もう死ぬ。絶対死ぬ。

そんな予感がして、用紙をベッドの下に落とした。せつかく今はもう、三十七八度の間で熱が上がり下がりしているのだ。

頭を悩ますことは極力考えないほうが良い。

考えるなら、好きなことを考えたい。

今度は用紙を落とした床に手を伸ばして、宅配で届いたダンボールの裾を、引っ張って寄せた。

中には、「ホームズ全集」と書かれた分厚い装丁の本がどっさり。おそらく二十冊はあるんじゃないだろうか。

一昨日、事件のトリックについて見解を聞きたいとかで、工藤から電話があった。

それで寝込んでいると途切れ途切れに伝えたところ、次の日にはこれが届いたわけである。

寝込んでいるだけだと暇だろうから、時間つぶしに読めということらしい。

電話で話している時は「鬼の霍乱だな」とからかわれたが、彼なりに心配してくれたようだ。

母からダンボールを受け取った平次はお礼のメールを送り、「おめーはエラリーばっかで、ホームズのすごさをまだあまりわかってねえみたいだからな。良い機会だから、貸してやる」という返事が来ている。

（見舞いの言葉も偉そうやなあいつは）

メールの内容を思い出して、苦笑しつつ全集の第一巻を箱から取り出した。

大人しく寝てるようにと、母にパソコンとテレビの電源を抜かれたが、ベッドの上での読書なら許してくれるだろう。

三日前、帰宅したとたん熱を出したときの母の対応はすばやかった。

強制的にベッドに寝かせて、インフルエンザではないかと気づいたら、かかりつけの医者を呼んで注射を受けさせて。

大滝警部には「熱が下がるまで絶対に、事件関連の連絡をせんといてください」と念を押して。

ついでに父親には「外の菌を持って来たらあかんから、平蔵さんはあまり平次に近づいたらあきません」と忠告していた。

いつもは厳しい父だが、実はかなり可愛がりたい息子の、久方ぶりの風邪である。

様子見と言う一見真つ当な理由で何度も会いに行きたかったらしく、妻にそう言われて心なしか肩を落としていたそうだ。

新一の母親もびっくりな親ばかりを發揮して、静華は息子の世話を焼いていた。

「あんたが風邪で寝込むなんて十年ぶりやし、お母さんめっちゃ心配やねん」

お粥を持ってきながら、上機嫌にそう言う母に「いや、単に大人

しくなった息子を子ども扱い出来て楽しいだけやるオバハン」と、平次は内心ツツコんだ覚えがある。

（この冷えピタも、もしかして子供用とちゃうやろな……なんかサイズ小さい気がすんで）

嫌な予感がしたが、考えても今の自分にはどうしようもない。

あきらめて読書に集中することにした。

が、枕元に置いてあったケータイがその時鳴った。

誰だと思い、画面を見ると幼馴染の名前。

実は今日、彼女と二人で駅前の洋菓子店に、最近人気のケーキを食べに行く予定だった。

それが風邪のせいで中止にせざるを終えなくなった。

いつもの事件ではなく、インフルエンザだったので彼女は逆に彼を氣遣って「謝らなくていいから、お大事にな」と言ってくれていた。

そして寝込んで以降、彼女はウィルスが移ったら駄目なので、携帯で一日一回見舞いのメールを送っている。

しかし今回はメールではなく電話のようだ。

横になったまま、通話ボタンを押した。

「どうしたんや、和葉」

「あ、平次大丈夫？ さっきおばちゃんから平次の熱もだいぶ下がってきたって聞いたし、今からお見舞いに行こうと思うねん。あたしは予防接種もしてあるから、会っても大丈夫やと思うし。それでな、何かほしいもんあったら買ってこようかなって。何かある？」

電話越しに聞こえる電車の通過する音と、時間帯から見て、合気道部の練習の帰りらしい。

日曜はいつも、この時間くらいまで学校で練習しているはずだ。ほしいもの、と聞かれて平次は「そやなあ」と考える。何気なく部屋を見回して、三時をさす時計に目が留まった。

「……ぷりん」

「え、プリンか？」

声がかすれたせいで、聞き取りにくかった和葉が聞き返す。そばの机に置いてあった水を飲んで、もう一度彼は言った。

「そうや。プリンが食いたい」

「わかったわ。じゃあ今から買ってそっち行かせてもらうし。待っててなー！」

そこで通話は切れた。

久しぶりに家族以外の人と会うので、心なしか楽しみにしている気持ちがあつたが、それには敢えて知らない振りをしておいた。

代わりに携帯をばいと置いて、和葉が来る時間を予測する。

学校から家までは電車だけなので、一時間以内にこちらには着くはずだ。

（あ、しもた。あいつ学校帰りやし、きっとあの店で買ってくるな……）

電車から駅を想像して、そこから更に今日行くはずだった洋菓子店を思い出して、平次は少し残念がった。

今日食べに行けなかった分、代わりにお持ち帰りのプリンを買うのは想像にたやすい。

あそのこのプリンは濃厚で、クリームとプリンが二層になって、かなり美味しい。

しかし、それはいつものことで今日ではない。

この風邪の状態で、あんな濃いものを食べる気になれるだろうか。

（でも、和葉が買ってきてくれるやつやし。プリンはプリンやし。まあ美味しいやろう）

根拠があるんだか無いんだかよくわからないことを、平次はだんだんかすんでいく意識の中で思った。

「あ、起こしてもうた？ ごめんな」

いつの間にか本を片手に寝ていた平次は、人のいる気配を感じて目を覚ました。

開けた視界に入っただのは、ゴミ箱に捨てるのも億劫で床に落としていたティッシュや紙を片付けている、セーラー服の和葉だった。

「なんや、来てたんか」

「うん、ついさっき。平次寝てたしプリンを置いて帰ろうと思ったけど、目に付く大きなゴミだけでも片付けておこうかって……熱は？」

「あー、まだあるけど微熱や。明日明後日辺りには落ち着くんちやうやるか。で、見舞いのプリンってそれか」

上半身を起こしながら答えた。  
体の節々が痛かったはずだが、今はあまり感じない。

「ああ、そうやったね。ちゃんと買ってきたよー」

学生かばんの側にちゃんと置かれた白いナイロン袋を見つけて平次が聞く。

あそこの洋菓子店は青い紙袋やなかったかなと一瞬思ったが、熱で記憶がごっちゃになっていているのだろうと思い直した。

「はい！ 特大ぶっちんプリン！」

「へ？」

袋から出てきたのは、手のひらサイズのぶっちんプリンだった。彼の記憶は間違っていないかったらしい。

いや、袋に書かれた「サンデーマート」というコンビニ二名に気づかない時点で、ある意味熱でまだ頭は回ってないかもしれないが。彼は予想外の見舞いに目を丸くした。

「平次からプリン食べたいって聞いたときは、今日行く予定やったあの洋菓子屋さんで買おうと思ってたんよ。でもあたし、前風邪引いた時これ食べたらめっちゃ美味しかったのを思い出してな。案外安くてあっさりしたプリンのほうが、風邪引いてる人には受けるんとちゃうやろかって…」

照れるように、購入に至った経緯を説明する。

しかし黙ったまじつとプリンを見つめる平次に、やはり安物よりあの洋菓子店のほうが良かったのだろつかと不安になった。

「あ、でもやっぱりあっちのプリンの方が良いなら、一応、おばちゃんとおじちゃんの分も含めて三個買ってきたよ！ 今からすぐに一階行つて取ってくるし」

「いや、ええ」

「え？」

「こっちのほうじゃ俺もええわ。今はあつさりしたんが食べたいねん、おおきに」

和葉の心配をよそに、彼女の手からそれを取り、妙に真面目くさつて平次は礼を言った。

事件のときに見るような、あのきらきらした目でプリンを眺めるものだから、和葉も少しどきどきする。

「お前、自分の分は買ってきてないんか」

「ううん、通常サイズのプリンを買ってるけど」

「じゃあ一緒に食べようや。一人で食べるのも味気ないし」

「うん！」

（こついつのシンクロっていうかテレパシーって言うんやろか。俺の欲しいもんを的確に買ってくるんやもんな！。何か感動やわ）

（おばちゃんも言ってたけど、熱で素直になってる平次ってめっちゃかわええー！）

二人そろってどこかずれた感動とプリンを味わいつつ、三時のおやつは互いにほんのり暖かな気分にしたようだった。

余談だが、和葉の買ってきた洋菓子店のプリンは、その日の夕食後に出された。

彼女も夕飯に呼ばれ、三個あったプリンを静華は自分と平次と和葉で分けた。

和葉が遠慮すると、「ま、平蔵さんには言わんかったらええでしょ」とニツコリ微笑み返されたと言う。

それを止めもせず、本日二個目のプリンを食べながら平次は呟いた。

「親父には絶対に言えへん記念日やな……」

## 2、プリンプリン記念日（後書き）

BGM：Fantasy（片瀬那奈）

前作「プリン記念日」がクリスマスネタだったので、色々こねくり回して（爆）春っぽく仕上げました。

タイトルを「プリンプリン」にしたのは……単なる直感です（笑）私の中の静華さんは最強で、そのしわ寄せを平蔵さんが食う傾向があるようです。

しかしきつと、後日和菓子和平蔵さんにあげたと思います。この夫婦、結構好きです。

### 3、グレートジャーニー

春も本番に近づいてきて、段々日の入りが遅くなってきた。足早に廊下を歩きながら、赤くなりつつもまだはつきりと出ている太陽を窓から臨み、和葉はそう感じる。

試合の次の日ということで、早めに部活が終わった彼女は、自分の教室に向かっていた。

夕日の差し込む教室で、ロッカーから出し忘れてたタオルを、スポーツバッグに仕舞う。

そして入った時とは反対側の扉から出ると、隣の教室に居た誰かが視界の端をかすった。

その一瞬だけで、「誰か」が誰なのかはわかった。

迷いも無く隣の教室に足を踏み入れる。

「平次やんか。今日剣道は無い日やし、帰ったんとちゃうん？」

「おう和葉。まあ、俺も帰るつもりではあったんやけどな」

一番後ろの窓際の席にいたまま、平次は片手を挙げた。

今この教室に居るのは、座っている彼一人だけ。

恐らく生徒の中で最も人気であるうこの席を、今学期彼は奇跡のくじ運でゲットしていた。

そんな特等席に和葉が歩み寄ると、彼が本を持っていることに気付く。

「教室で読書？」

彼がよく本を読むのは知っていたが、教室でのそれは初めて見るので、首をかしげる。

その疑問に、平次は苦笑した。

「今日が返却予定日やということに、今日のホームルーム中気付いたんや……」

「ぎりぎりすぎやな」

「そやから、部活も無いし今読んでるんや」

薄い本なので、放課後の時間内で読めるだろうと彼は付け足す。和葉がその文庫本を見下ろすと、確かにすぐ読めそうな厚さである。

しかし彼女の意識はすぐに、その表紙へと移された。

「へー、平次にしては珍しいもの読んでんなあ」

いつも推理小説ばかり読んでいるイメージがあったので、タイトルを見て、彼女は意外に思う。

彼が手にしていたのは、昔アメリカで出版された、ある一羽の力モメが飛ぶことに意義を見出す寓話だった。

彼女も中学の時に読んだ、有名な作品だ。

「図書室でうろつろしてたら目に留まったんや。この本有名やけど、  
そつえば読んだことないなあって思つて」

「そつか。……あとどれくらいで読み終わりそつ？」

栞のあるページに人差し指を、表紙に親指をそえ、彼は今まで読んできた厚さを確かめる。

「三十分もあれば終わるな」

もう三分の一程度しか残っていないが、ゆっくり読んでいるようだ  
と和葉は察した。

「じゃあ、せつかくやし終わるまでここで宿題やってもええ？」

「ああええで」

平次が本から目を離さず答えると、和葉は彼の一つ前の席に、出来るだけ音を立てずに座る。

かばんから教科書とノートと筆記用具を取り出して、そのまま宿題に取り掛かった。

科目は古文。

提示された話の現代訳に、意識を集中することにする。

暫くの間、ページをめくる音とシャーペンが字を刻む音だけが、

教室に小さく響く。

時々、グラウンドから野球部の気合を入れる声も飛んできた。女子生徒二人が廊下をばたばたと、甲高い声で話しながら走っていく姿も一度だけあった。

しかし集中している彼らが、顔を上げることとはなく。穏やかな中にも、ぴんと一線何かが張っている空気がそこにはあった。

そしてきっかり三十分後。

ぱたんと薄い本を平次は閉じた。

それを背中で感じ取った和葉が振り向く。

「終わったん？」

「おう」

そう答える平次の顔は、どこかぼんやりとしている。

推理小説を読んだ後に見せるような、きらきらした表情ではない。例えるならば、寝起きの顔。

読了後の余韻、というやつだろうかと彼女は思った。

「良い話やったって感じやね」

「いや、良いっちゅうより不思議な話やった。うん」

まだ余韻が消えないのか、彼はじつと表紙を見つめている。そんな彼の顔つきがいつもより幼く見えて、和葉は少し笑った。

「どんな風に不思議やったん？」

「んー……ある一つの人生の中を旅した感じ、やな」

「旅？」

「そうや、旅や」

本に出てくるカモメの人生を、その側でじっと見ている気分になるのだと、平次は言う。

一羽のカモメが信念を持って生きていく光景は、自分が今まで見たこと無いものだった。

食えることよりも飛ぶことが重要だと信じ、ひたすら飛び続け、そこで見つけた真理をまた若いカモメに伝える。

そんなゆつくりと流れるような、生き方をするカモメの側に、ついて行った。

「そやから、旅かあ。平次が読んだ後ぼけっとしてたわけがわかったわ。平次は本の中でジョナサンについてって旅をしたから、そこからすぐに現実に戻れんかったんやな」

普段なら言わなさそうな、想像の世界を話す平次は和葉にとって新鮮だったが、違和感は覚えなかった。

常に彼には生臭い事件が周りに漂っているの、今のような彼が表に出てこないだけだろうと彼女は思う。

「何や、俺そんなにアホ面してたか」

「まあ、今回に限ってはアホとはちゃうと思うよ」

「“限って”とは何や、”限って”って。……あー、何かどっかに  
行きたくなってきた」

ツッコミは忘れず、しかしいつもより早く気分を切り替えて、彼は椅子の上で背伸びをした。  
ずっと読んでいたせいで、いくつかの関節が乾いた音を出した。

「へえ、本に影響されて旅でもしたくなった？」

彼女が面白そうに身を乗り出すと、彼は「そつやな、旅やな」と、同じく会話を楽しむかのように笑った。

「どこに行きたい？ 何なら、あたしがついてってあげるで」

先ほどの、平次がカモメについて行ったという話を引き合いに出す。

「お、そうか？ ——じゃあ、まずは図書室の返却ボックスへ」

「えらい近い旅やな」

「まずは、って言ったやろう」

「じゃあその次は？」

「ま、それは追々考えたらええやんか」

がたん、と椅子を後ろに引いて彼が立ち上がる。

「ほれ、ついてってくれるんやろ？」

「はいはい」

彼女も机の上に出したものをかばんに仕舞いこんで、腰を上げる。既に支度をすませた平次の隣にらんで、教室から廊下へ出た。和葉は改めて、目の前に広がる長い廊下を見通す。

廊下はまっすぐ一本道で、その突き当たりの階段を上がれば図書室がある。

先ほども歩いたその廊下が、今はいつものように見えなくて、彼女は不思議な気分になった。

「なあ、次の旅は寝屋川駅まででどう？」

「それもええな」

横に立つ少年を見上げて、そう提案する。

最初の旅は短いが、この彼とだったら、とても素晴らしくわくわくするような気持ちになれるだろう。

そんな確信を抱いて、和葉は平次と共に一歩踏み出した。

### 3、グレートジャーニー（後書き）

BGM：夜鷹の夢（by Do As Infinity）

不思議な話になりました。

平次が読んでいた本はわかられた方も多いでしょうが、「かもめのシヨナサン」です。

「かもめの」は何も考えず読んだらすぐ終わりますが、色々思いながら読むと結構長くなるような気がします。

#### 4、花の下の君、花愛でる君

まずは髪を柘植の櫛でとかす。

そして後頭部まで一気に上げる。

口にくわえてたりボンを右手で取って一重、二重にくるくる縛る。  
そのまま一定の位置に固定された髪を、残ったリボンの長さで蝶々結び。

「……上手いことできるもんやなあ」

「そう？」

和葉のポニーテールが出来るまでを眺めながら、しみじみと平次が呟く。

昔からこの髪型をメインにしていた彼女は、流れるような仕草で、後れ毛をピンで留めている。

ここは服部家の居間。

夕飯にてつちりを作るということで、和葉はお呼ばれされていた。その夕飯が出来上がるまでの間に、合気道部の練習のせいで少し崩れた髪形を直していたのだ。

何もすることが無い平次は、その様子を見ていたのだが。

鏡も無しに、目が後ろにでもあるかのような器用さで一つの作品が出来上がるその様は、男の平次にとって真新しい世界だった。

「もうこの髪型とも十数年の付き合いやしなあ。そら慣れるて」

「そついうもんか」

「そついうもんや。平次のおばちゃんかてあの綺麗な髪形毎日素早く作ってるやろ？」

最後のピンをうなじの辺りに、すつと差し入れる。

いつもの和葉の出来上がりだ。

「長い髪を、ようそんなに器用に扱えるもんやな。他の事やとどんくさいのに」

「最後の言葉はよ・け・い！」

じろりとにらんだ彼女を、平次は乾いた笑いで受け流す。

机についてた肘を離して、胡坐をかく膝に手を置いた。

そして反対の手にある煎餅を、ぽりつと歯で噛み砕いた。

彼女も頬を膨らましながらかも、前に置かれた茶に手を伸ばす。

ずずつと煎茶を飲むごとに、頭のとっぺんに「くつついた」ポニールが静かに揺れた。

その動く物体を、彼はぼんやりと眺める。

彼女のそれは頭とつながってると言うより、その部分だけ違う物がくつついてる感じた。

以前「ホンマに繋がってるんやろか」と思って引つ張ったら、思い切り頬をしばかれたことを思い出す。

周りの人間に言わせれば「お前はアホか」な行動である。

そんなことを彼が考えてる間に彼女がことり、と茶碗を茶たくに戻した。

するとまたそれが揺れる。

今度は庭から入り込んできたそよ風も伴ったため、さらりと左に流れた。

その動きに、いつかの記憶が重なった。

「他の……」

「ん、何？」

「他の、髪型はせえへんのか？」

「へ？」

「……あ」

ぼんやりしていたら、思ってもみなかった言葉が勝手に口から出て自分でも驚く。

左右に静かに揺れる髪を見ている内に、催眠術にでもかかったかのような。

一方の和葉は突然の質問に一瞬怪訝そうな顔をしたが、次に「他の髪型なあゝ……」と顎に手をあて考え込んだ。

「別にせえへんわけやないけど、何となくこれが一番落ち着くねん。それとも平次は他にやってほしい髪型でもあるんか？」

机を挟んで向かい側に正座する和葉は、少し目を輝かせて平次に

問いかける。

いつもの彼なら言わないことでも、今なら言ってくれそうな気がしたからだ。

姿勢好のことで彼が言及することは、過去にあまり無かった。けれども、逆に聞き返された本人は無意識の行動だったので、ぐっと詰まる。

一瞬目視線が泳ぐ。

そして、先ほど重なった記憶がすぐに思い返された。

春風とともに揺れる艶やかな着物。

桜の下で鞠をつく少女。

その少女がしていた髪型は――…

「二つくくり、とか」

「二つくくり？ ツインテールか？」

何故かと伺うように彼女が目を向ければ、「何となくや！」と、何故か怒ったように平次は顔をそらした。

聞かれても困るのだ。

ただ、彼女の揺れる髪を見ていたら、あの光景が思い出されたのだから。

そしていつの間にか、自分でも知らないうちに聞いてしまっただけなのだから。

自分でもらしくないと思うあやふやな言動に、彼は戸惑った。眉を顰めてこっちを見てくる和葉の視線が、らしくない自分をより恥かしくさせてしまう。

その状況に耐え切れず、もつといいと彼が言おうとしたその時。

「そんなら、来週ツインテールしてくるわ！」

「え？」

「来週の日曜、おばちゃんの知り合いの家のお茶会ウチら行くやろ？ その時着物着るさかい、たまには髪型も変えてみるわ」

どんな感じになるやろねー、と彼女は笑いかけた。

そんな笑顔に平次は目を大きく開いた後、平然を装って「さよか」とだけ返す。

リクエストに応えたにも関わらず素っ気無い返事だったが、和葉は怒らなかった。

なぜなら彼の顔はどこか嬉しそうだったからだ。

「もしかして平次ってツインが好きやったんやろか」と、少々外れたことを考えながら、来週の着物と髪飾りについてデザインを練った。

そして件の日曜日の茶会において。

平次が和葉の家に迎えに行くと、彼女は普段よりしっとりとした雰囲気をもとって、玄関から出てきた。

「お待たせ」

「おう」

二人で、静華が待つタクシーまで歩く。

和葉は予告どおり、千代紙のような和風の模様が描かれたリボンで、髪を二つに縛っていた。

リクエストした本人の平次が、それについて言及することは無く、先日と同じような理由なのか、彼女もまた、そんな彼の態度に機嫌を損ねることはなかった。

沈黙を保つ彼らの代わりに、ツインテールはさらさら揺れる。

ちなみに着物は、薄紅色の桜が踊った、鮮やかな色合いだ。

髪型以外では何も話し合うことは無かったのに、その姿は平次の目を惹きつけた。

懐かしいとか、美しいとか、そういう類の魅力ではない。

それはもっと、手が届きそうで届かない、花のごとく。

尊いものを見るかのように、彼は目を細めた。

「かなわんな」

その言葉の意味を和葉が知るのは、もう少し先のことであった。

#### 4、花の下の君、花愛でる君（後書き）

BGM：time after time（花舞う街で）（by 倉木麻衣）

プリンプリン記念日よりこちらの話のほうで、前作からの変更部分が多いかもしれません。

台詞一つ変えるだけで、結構雰囲気が変わるものだなと実感しました。

次話で最後です。

## 5、サクコイ（前書き）

このいつもよりラブ度の高い話で、今回の連載を終わらせていただきます。

いつもと少し趣を変えた短編集だったので、私自身も楽しかったです。

短い間でしたが読んで下さった方々ありがとうございました。

## 5、サクコイ

「たまには、こういうのもええな」

「そやる？」

縁側に座った平次の隣で、同じく腰を下ろしている和葉が頬を緩める。

風が吹くたびに舞い落ちる花びらは、CGでもないのにこの世のものとは思えぬ艶やかな色合いを見せていた。

日付は三月十四日午後一時過ぎ、場所は服部邸、庭を臨む縁側。

二人は絵に描いたような花見を満喫していた。

この催しを提案したのは和葉。

バレンタインのお返しに悩んでいた彼に、彼女は「昨日こう言ったのである。」

「平次とお花見をしたい」

しかも、服部家の縁側でと付け足した。

平次はそんな簡単なことでいいのかと聞いたが、彼女は「やるのは簡単かもしれないけど、機会を作るのは難しいんよ？」とにっこり笑っただけだった。

そして今日。

彼女のリクエストどおり、服部家の縁側では豪華な漆塗りの重箱が用意され、二人だけの花見が行われている。

お花見弁当を作ったのは、勿論静華。

平次が言いにくそうに、且つ照れくさそうに前日頼んだのだ。息子の滅多に無い頼みに、母は大喜びで豪華な弁当を作った。男の平次より、女和葉好みの、小さなおかずをたくさんこしらえて見栄えを彩らせた。

味も当然一級品で、二人はそれぞれに用意されたそれを完食。食べた後は、こつやつて桜の香煎、つまり桜の花びらを炒ったお茶を楽しんでいるのであった。

「毎日平次は、自分の部屋からこれ見れるんやなあ。うらやましいわ」

和葉が感嘆するだけあつて、服部邸をぐるりと囲うように咲き誇る桜は、圧巻だ。

この庭で演歌でも歌えそうな雰囲気だ、とは先日やって来た東京の友人の弁。

通年手入れもしているので、枝の伸び具合から花の咲き加減まで、文句のつけようがない。

縁側でお茶を一口飲んで、和葉息を吐いた。

「最近、こんな風にゆつくりすること無かつたんとちゃう？」

「かもな。昼寝には最高のコンディションや」

「じゃあ寝る？ 居間にある掛け布団持ってきてあげよか」

今日は昼寝じゃなくて花見をする日だ、みたいに突っこまれるか

と思つてた平次は、意外に優しい言葉に目を丸くした。

「何や、えらい今日は甘やかすな」

「だつて平次、ホンマに眠そつな顔してるんやもん。無理やり起こす気になれへんわ」

おかしそうにくすぐすと笑う彼女は、立ち上がつて本当に居間に行こうとする。

しかしそれを、当の平次が右腕を掴んで引き止めた。  
突然下から軽く引つ張られた和葉が、眉をひそめる。  
対する彼は、掴んではいても、彼女のほうを見ないまま言った。

「やっぱええわ。そこまでされると逆に困る」

「へえ、どんな風に？」

彼はすぐに手を放したが、困るという言葉に、彼女は再び腰をおろした。

そして眠たそうにぼんやりとする、彼の横顔をうかがう。

平次はまだこちらを振り向かない。

ずっと前から視線の先には同じ桜。

不意に黙りこんだので、和葉が怪訝に思い口を開こうとするが、その寸前に、彼が答えた。

「いつも言わんことも、全部言ってしまいそうになる」

その言葉は、彼女の息を詰まらせるのに十分だった。  
しかし。

「それって、言ってしまったらあかんの？」

「……今は、まだその時やない」

普段なら、するはずがない会話だった。  
いつもいつも避けてきて。

触れたとたん、雪のように消えてしまうような。

そんな不安があつて、自ら出すことのなかった話題だ。  
恐らく平次も、ほぼ同じ気持ちであつたに違いない。

それが今不思議と、自然に話せている。

花見をしたいと言ったが、こんな話を持ち出すためにしたわけ  
ではない。

ただ純粹に、二人で一緒にいたかっただけだ。

しかし和葉は、今の状況と彼の言葉に戸惑うことはなく。

むしろ当然のことのように、受け入れられた。

心のどこかで、既に知っていたことなのかもしれないと思う。

彼女は心中、悟った事実を素直に認める。

一旦認めてしまうと、胸の奥に暖かいものがずっと流れ始めた気がした。

一方の平次は、彼女の心境に気づいてるのか気付いてないのか、  
そのまま言葉を続ける。

「それに、や。今言ってしまうと自分の力で言った気にならへんのだ。言うのなら、自分の意志で言いたい」

「じゃあ今なら、何の力で言うことになるの？」

触れそうで触れない距離に和葉は座っている。  
彼はそちらのほうにやっと顔を向けた。

「桜のせいになりそうやん」

せつかく向いてくれた彼の表情が、逆光で捉えにくい。  
今彼はどんな顔をしているのか、和葉は知りたくなる。  
二人の間に花びらくらいしか入り込めないほど、至近距離になるまで近づく。

和葉はじつと彼をのぞき込み、平次も彼女を見つめ返した。  
彼らは、言葉を発しない。

影が混じる平次の顔は、存外真面目な眼をしている。  
その視線から目をそらせなくて、彼女は惹き込まれた。  
確かに、今なら何を言っても自分のせいではない気がする。

「……わかるような気がするわ」

思わずそう呟くと、彼が静かに彼女の肩に腕を回して抱き込んだ。  
お互いの心臓の鼓動がわかる。

早くはなかったが、ゆっくりでもなかった。

「これも桜のせい？」

「そうや、桜のせいや」

言葉に出来ぬ代わりに。

せめてこの暖かさだけでも、伝えることができたなら。

和葉は静かに目を閉じた。

平次も彼女の肩に顔を伏せる。

暫くの間、桜の魔力は彼らを離すことを許さなかった。  
そして彼らも、離れる気は無かった。

花びらだけが、二人の本当の恋を知っている。

## 5、サクコイ（後書き）

BGM：サクラビト（by Every Little Thin）  
g

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8475d/>

---

桜恋—サクコイ—

2010年10月15日23時34分発行